

Title	国立大学法人大阪大学となって
Author(s)	吉野, 勝美
Citation	大阪大学低温センターだより. 126 P.1-P.1
Issue Date	2004-04
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/11539
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

国立大学法人大阪大学となって

低温センター長 吉野 勝美

平成16年4月1日から全国の国立大学が法人化され、大阪大学の正式名称も国立大学法人大阪大学となった。当面運営交付金が国から支給されるので、何となく一寸した変更には過ぎないように感じ取っている向きもあるようであるが実は大変な劇変である。日本では明治10年に帝国大学が創立され、第二次世界大戦後の学制改革でそれらは新制の国立大学として発展を続けることとなったが、また、新たに多くの国立大学が生まれた。その後、何度かのいわゆる大学改革、大学院大学化などがあるが大学は大きく変化したように思われがちであるが、それらは考えてみると比較的小さな変化である。要するに国の将来を決める重要な教育研究の基幹組織としての国立大学が消えると云うことは長期にわたって極めて大きな影響を及ぼすことは自明である。

法人化が日本の将来にとって、また勿論国民にとって良いことかどうかについては様々な意見、考え方があろうが、経済原則、効率化が余りに前面に出すぎるのでは考えものと思っている。しかし、ともかく、一旦法人化したとなるとこれを最大限にいい方に生かさなければならないのは云うまでもない。なんと云っても弾力のある組織、運営形態に持っていき、自由な発想で、自由に活躍できるようにしなければならない。すなわち、前向きに捉えて行動すべきである。恐らく法人化当初は運営交付金が主たる財源であるので、ありとあらゆる面で従来の公務員的性格、立場、行動様式、制限が明に暗に残るに違いないが、できるだけ短い過渡期で弾力的に、積極的なものに変えていく必要がある。これは勿論、教育、研究両面に対してである。

低温センターは研究支援組織として位置づけられるが、その重要性はますます大きなものとなってくる。低温センターの機能の不全により液体ヘリウムなどの供給途絶をもたらせば、研究に致命的な支障をもたらすのは自明であり、電気、水に匹敵する研究のライフラインの要のセンターとなっている。法人化によって財政的にも効率化、自立化が求められる結果、全学の活力を生かし、最大限に成果を発揮させるのに極めて重要な役割を担うことになっているのである。低温センター職員、教員と共に総力を挙げてその役を担いつとめを果たしたいと思っている。

これから、どうしても比較的短期間に出る成果、直近の成果が求められ、それでまた評価されがちであるので、どうしても研究が近視眼的になる危険性があるように思えてならない。決して長期的な視点を失ってはならないと考え、自ら反省を繰り返している。このことをいつも子供の頃の先生との会話から得た次の言葉で締めくくりにしている。

“櫓は向こうの山見て漕げ”

最初に櫓で船を漕ぐときは大抵櫓を見て、即ち、櫓と舟の接点の所を見て漕ぐが、これではうまくいかない。櫓を見て漕いでいてはグルグル廻るだけで決して舟は真っ直ぐには進まない。ところが、向こうの山を見て漕いでいると、自然に真っ直ぐ目的地に向かって確実に進むと云うことである。

自らの目標をしっかりと見据えて、着実な努力を怠らなければ必ず素晴らしい成果がもたらされるものと確信している。